活躍する明専会員に聞く②

JNC株式会社 代表取締役社長 山田 敬三（環57）氏

聞き手 ユニクス株式会社 代表取締役 竹林貴史（化58）

「本質的な原因追及・課題解決をするように」「グローバルな視点を」と語る山田社長

このシリーズは、企業や団体のトップクラスで活躍中の明専会員に、明専会員がインタビューして、特に学生の皆さんや若手の方をターゲットとして語っていただく企画です。第2回はJNC株式会社の山田敬三社長に登場していただきます。

―学生時代はどう過ごされていましたか？

特に部活経験はありませんが、学内の各種大会への参加や山登りなどにはよく出かけました。そのことで体力はついたと思います。出身は博多ですが、大学時代は大学近くで下宿生活をしました。

―特に思い出に残っているものはありますか？

大学4年と大学院は環境工学科・原泰毅研究室で過ごしました。研究室では知識を学ぶだけでなく、問題を見つけてどう解決していくかが重要であることを学びました。また、一人だけで解決するのではなく、皆で解決するスタイルを学びました。

―液晶関連の仕事の道に進まれていますが、どういった切掛けだったのでしょうか？

社会人になったらケミカルとエレクトロニクスを融合したものをやりたいと思っていました。学会で九州大学の博士課程の方と知り合い、液晶について話を聞き、液晶に対する関心が大いに高まったのを覚えています。将来、液晶関連の研究・仕事ができたらと思った次第です。

―会社経験についてご紹介ください。

入社してすぐ水俣工場に配属され、10年間、液晶材料の生産プロセス開発に従事しました。その後、本社事業部で5年間、液晶関係の特許戦略や中国からの原料調達などを行いました。その後、再び水俣と戸畑で、液晶関係製品の生産管理を担当しましたので、延べ20年という長い間、液晶部門の仕事でした。

―学生時代の思いが実現したわけですね。

実は2004年からは液晶から離れ、有機ELやシリコーンなどの電子情報材料の事業開発に従事し、そこで営業も経験しました。新しく自社で開発されたシリコーン材料の市場開拓という技術営業でした。新材料が具体的に何に使えるかを用途開拓で展示会にも出展してニーズと

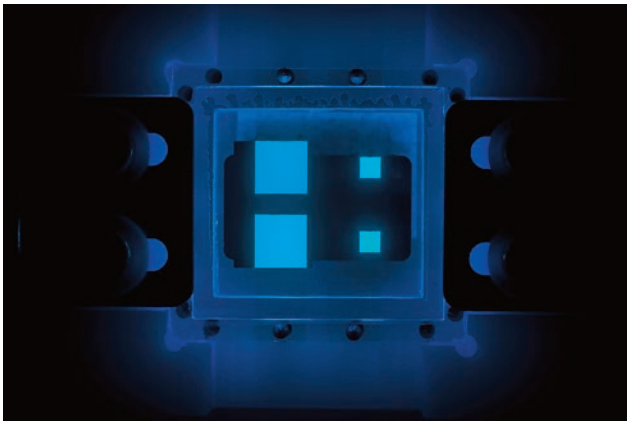
シーズとの出会いを通して、お客様のニーズを聞くことができました。その経験は技術畑の私にとって後に非常に役立ちました。

２０１３年からは市原製造所に移り、石油化学部門を担当、徹底した生産の効率化を推進しました。２０１７年からは化学品部門全般の製造・販売そして購買・物流の仕事にも関わり、複数の事業を視ることで、全社的な視点が養われました。

ー会社（ＪＮＣ）についてご紹介ください。

ＪＮＣグループは１９０６年に創業し、初期は肥料会社としてスタートしました。その後、石油化学製品、繊維製品、ファインケミカル製品と事業展開を図ってきました。発想豊かな製品が多く、広く世の中でご利用いただいています。ＪＮＣは代表的な製品である液晶材料に次いで有機ＥＬ材料など技術力を駆使した製品で社会の進歩に貢献します。

その他、再生可能エネルギーである流れ込み式水力発電所を九州に13カ所保有しています。また、水力発電で培ったノウハウを活かし、太陽光発電にも取り組んでいます。



有機 EL 材料

水力発電所

ー今年、社長になられましたが、特に取り組まれていることは？

事業全般の構造改革を進めています。技術中心からビジネスマインドを持った技術経営的視点で行うことが大切だと考えています。最近、人工知能やビッグデータなど取り扱っている研究室と接することがあり、学生の半分がベンチャーを目指していることに驚かされました。自らが社長を目指すということはよいことで、世の中の変化を推進していくでしょう。

ユーザーとのつながりも重要であり、化学の可能性を広げることになります。会社としてはそのような場を提供することが使命であり、何よりも人が大事です。『きちっとした人が育つ会社、人を育てる、人が育つ会社』にしていきたいと思います。人に会うこと、特に同業他社のみならず異業種交流に積極的に取り組んでいます。

お客様とのコミュニケーションを大切にし、お客様の意見・ニーズをしっかりと形にしていきたいと思っています。

ー長年の会社経験の中で特に思い出に残っていることなどがありましたらご紹介ください。

静電気による火災事故を経験したことがありました。学生時代のラボレベルの実験と製造現場での生産は決定的に状況が異なります。スケールが上がると移動スピードが速くなるといったこともあり、過去の事例をもとにした安全教育を徹底的に行っています。各工場に静電気着火や粉じん爆発を実感してもらうような実験設備なども整備し、またＤＶＤなど記録動画なども安全教育に活用しています。製造現場では特に安全面に気をつけなければならないと痛感しました。

ー会社の皆様によくお話しされていることは何ですか？　仕事の取り組み方、人との係わりなど

場当たり的な仕事はするな！　本質的な原因追及・課題解決をするよう強く言っています。

ー健康管理などに気を付けていることなどがあれば

高校・大学時代は自転車で旅行するのが好きでした。会社に入ってからは地域活動にも参加するようになりました。昔から身体を動かすのが

好きで、基本よく歩きます。それが健康につながっていると思います。

―明専塾でもお世話になっていますが、明専会については？

第81回（２０１５年）の明専塾では、ＪＮＣの会社説明と社会人としての仕事の取り組み方について学生の皆さまに紹介させていただきました。その時に学生の皆さまと交流会を行い良い思い出となっています。

その後、第142回（２０１７年）の明専塾にも参加させていただきました。その時、私はスケジュール上、講演会には参加できませんでしたが、そのあとに行われた交流会には何とか間に合い、再び学生の皆さまと交流を深めさせていただきました。

取材風景

その他にも、明専女子塾への弊社女子社員の参加や、私自身が大学での講演会を行うなど、考えてみますと、明専会とのお付き合いは多く、更に今回、このような機会をいただき嬉しく思っています。

明専会は異なる会社の方と交流できることが一番良いですね。今後も東京支部の活動に参加したいと考えています。

―学生や若い人に一言お願いします。

社会や企業はまさにグローバル化が進んでいます。一方で日本の技術の国際的優位性がなくなってきています。今、学生の皆さまにお願いしたいことは、是非、若いうちから海外との交流を深めグローバルな視点で自信を磨いてください。また色々なことに取り組むために体力作りもしっかりとやることをお勧めします。

―大学へも一言お願いします。

大学の基礎研究が少なくなっているのではないかと危惧しています。日本が世界で技術立国として先頭を走るために、もっと基盤研究にも力を入れ、若い方々に技術の本質を探っていって欲しいと思います。

※今日は長時間どうもありがとうございました。

■聞き手の感想

インタビュアー

明専会理事（東京支部化学分会長）

ユニクス株式会社　代表取締役

竹林貴史（化58）

「山田社長とは入学年が一緒で、山田社長が環境工学科、私が工業化学科と科は異なりましたが、履修科目がほぼ同じで、入学当時から交流がありました。優しい語り口は昔と変わらず、今回久しぶりの再会でしたが学生時代の感覚のままインタビューを行うことができました。大手企業の社長という立場となり、これから忙しい日々が続くと思いますが、少しでも時間を割いて明専会の行事に参加していただくことを願っています。人を大切にする山田社長（いや山田君）、これからも良き友人としてお付き合いください。」

写真は２０１９年９月３日
大手町ＪＮＣ本社にて

左から山田社長、竹林、蔵本
（JNC 応接室）

■同席・文責

明専会副会長・東京支部長

蔵本正彦（化51）